

福岡市総合図書館映像ホール
Fukuoka City Public Library Movie Hall

シネラ

Ciné-là

特集

韓国の名優

キム・スンホ

チェ・ウニ

金勝鎬と崔銀姫

シネラ・ニュース
May.2002 No.70

今井正監督特集

特集



『青い山脈』

イラスト:花野孝史

5

特集 50年代から60年代の韓国映画で、大衆の心を捕らえた名男優キム・スンホ(金勝鎬)と名女優チェ・ウニ(崔銀姫)の出演作の特集。

韓国の名優

金 キム・スンホ 勝鎬 と 崔 チェ・ウニ 銀姫

朝鮮戦争後の50年代から60年代の韓国映画で、大衆的な人気を博した代表的な俳優がキム・スンホとチェ・ウニである。またこの時期は観客数や製作本数が増大し、韓国映画が大きな盛り上がりを見せた時期でもある。大衆娯楽の中心的存在となった映画の中心となるテーマはメロドラマであり、そこには韓国の伝統的価値観が色濃く反映している。

その中でキム・スンホは「お金」や「荷馬車」に登場するような朴訥で庶民的な韓国の父親像を表現し、チェ・ウニは「成春香」で韓国の伝統的美人像を、「離れの客とお母さん」では伝統的な倫理観を持つ女性像を表現する。しかしそれ以上にキム・スンホの演技にはしみじみとした慈愛がにじみ、日本人から見ても共感を覚えずにはいられない。チェ・ウニの美しさも時代を代表するものであることは、今回の上映作品を見れば理解できるだろう。

日本の俳優にたとえるなら、顔は似ていないが、笠智衆と原節子を連想してしまうのだ。このたとえが正しいかどうかは観客の皆様にご委ねるとして、韓国映画の黄金時代を代表する名優二人の作品をお楽しみいただけたらと思う。

会 期：15日(水)～18日(土)
22日(水)～26日(日)

観覧料：500円(大人)
400円(大学生・高校生)
300円(中学生・小学生)

※定員制・各回入替制。
※チケットはすべて当日券です。前売り券はありません。
※福岡市在住の障害者の方は無料、福岡市在住の65才以上の方は半額。(手帳の提示が必要です。)

23日(木) 19:00
26日(日) 11:00

荷馬車

Coachman



監督：カン・テジン(姜大振)
出演：キム・スンホ(金勝鎬)
シン・ヨンギョン(申榮杓)

1961年/35ミリ
モノクロ/98分

日本語字幕付き

主人公は妻に先立たれ、男手一つで4人の子育てをしている。しかし長男は司法試験の入試にすでに3度も失敗、二男は毎日喧嘩ばかり、長女の夫は暴力を振るい、二女は金持ちの男を捕まえることしか考えない。それでも彼は希望を持って真面目に働くのだった。60年代のソウルの街並みや生活が実感できる心温まる秀作である。

15日(水) 19:00
18日(土) 11:00
23日(木) 14:00

離れの客とお母さん

The Guest and My Mother



監督：シン・サンオク(申相玉)
出演：チェ・ウニ(崔銀姫)
キム・ジンギユ(金振奎)

1961年/35ミリ
モノクロ/103分

日本語字幕付き

夫と死別したチョンスクは娘のオッキとつましく暮らしていた。そこへ夫の友人であるソノがやってきて、間借りをするようになる。次第に惹かれ合うチョンスクとソノだが、世間の目を気にして、気持ちを表すことができない。物語の進行をオッキのナレーションで行うことで、愛らしい作品となっている。

心の故郷

Country of My Heart



監督：ユン・ヨンギョ(尹龍奎)
出演：チェ・ウニ(崔銀姫)
ビョン・ギジョン(卞基鐘)

1949年/35ミリ
モノクロ/77分

日本語字幕付き

幼くして山寺にあずけられた少年ソンは、ソウルから母親が迎えに来る日を待っていた。ところがある日子どもを亡くして寺に供養にきた女性が、ソンを養子にしたいと申し出る。少年の心を抒情的に描いた文芸大作で、47年にデビューしたチェ・ウニは本作で一躍有名になる。

ロマンス・パパ

Romance Papa



監督：シン・サンオク(申相玉)
出演：キム・スンホ(金勝鎬)
チェ・ウニ(崔銀姫)

1960年/35ミリ
モノクロ/131分

日本語字幕付き

生命保険会社に勤めるキム係長は52才、家庭では2男3女の父だった。ところが不況のため、キムは突然会社を解雇されてしまう。子ども達に心配をさせたくないキムは、毎日背広を着て出かけては、公園で時間をつぶすのだった。キムを中心とした家族の交流が楽しく描かれ、笑い涙に溢れたホームドラマである。

常緑樹

Evergreen



監督：シン・サンオク(申相玉)
出演：チェ・ウニ(崔銀姫)
シン・ヨンギョン(申榮杓)

1961年/35ミリ
モノクロ/142分

日本語字幕付き

1930年代、ソウルに住むヨンシンは、農村啓蒙運動の中でトンヒョクという青年に出会い、生涯啓蒙活動を続けることを誓い合う。学校を卒業したヨンシンは先生として田舎に赴任し、教育の必要性を説くのがだった。30年代韓国で実際に盛んに行われた農村の啓蒙運動を背景にしており、強いメッセージを持った作品である。

お金

Money



監督：キム・ソドン(金蘇東)
出演：キム・スンホ(金勝鎬)
チェ・ウニ(崔銀姫)

1958年/35ミリ
モノクロ/118分

日本語字幕付き

農民ボンスは息子の結婚のため借金返済のため、米を高利貸しのオクチョに売るが、博打をしてオクチョにお金を騙し取られてしまう。絶望するボンスは偶然オクチョの落としたお金を拾うのだが、朝鮮戦争が終了して疲弊した農村を舞台に、お金に弄ばれる人々を描いた作品で、名優キム・スンホが哀れな農民ボンスを演じ、心情を際立たせる。

成春香

The Story of Sung Chun-hyang



監督：シン・サンオク(申相玉)
出演：チェ・ウニ(崔銀姫)
キム・ジンギユ(金振奎)

1961年/35ミリ
カラー/108分

日本語字幕付き

李朝時代に書かれた作者不詳の原作小説「春香伝」は韓国人ならだれでも知っている愛の古典であり、これまで韓国では何度も映画化されている。本作はシン・サンオク監督が妻のチェ・ウニを主演にすえて製作したもので、公開当時大ヒットを記録している。どんなに拷問されても愛を貫くチュニャンをチェ・ウニが熟演し、感動を呼ぶ。

米

Rice



監督：シン・サンオク(申相玉)
出演：チェ・ウニ(崔銀姫)
シン・ヨンギョン(申榮杓)

1963年/35ミリ
モノクロ/124分

日本語字幕付き

60年代、朝鮮戦争で片足を失ったヨンは、父親が危篤の知らせで故郷の村に帰る。そこは米がなかなかとれない貧しい村で、父親の死後、ヨンは山にトンネルを掘って、荒れ地に水を引く決心をする。朝鮮戦争後の山村の復興を、希望を込めて描いた作品で、村人が一致団結して岩山を掘り進む様は感動的である。

今井正 監督 特集

青い山脈・ 続青い山脈

とある地方の女学校を舞台に思春期の女学生達と、進歩的な女教師の交流をユ一モアを交えて描いた戦後の青春映画の代表作。主題歌も大ヒットし、その後、幾度かリメイクされている。女学生の新しいものと、旧制高校の生徒からラブレターが届く。新子は尊敬する女教師の島崎に相談するが、実はラブレターは新子の同級生による悪戯だった。

監督：今井 正
原作：石坂 洋次郎
主演：原 節子
木暮実千代

1949年/35ミリ/モノクロ/183分/藤本プロ=東宝

2日(木)14:00 4日(土)15:00
9日(木)14:00 11日(土)15:00



2日(木)19:00 5日(日・祝)11:00
11日(土)11:00



空襲の中で知り合い、恋に落ちた若い男女が戦争によって引き裂かれていく。ロマン・ロランの小説「ピエールとリュイス」をもとに水木洋子、八住利雄が脚色し、今井正が演出した本作は、戦争の悲惨さを訴えながらも、優れた抒情性を持った作品として、日本映画史に残る恋愛映画の傑作となった。キネマ旬報ベスト・ワン。

監督：今井 正
主演：岡田 英次
久我 美子

1950年/35ミリ/モノクロ/111分/東宝

また逢う日まで

3日(金・祝)11:00 5日(日・祝)15:00
10日(金)19:00 12日(日)11:00



国内で唯一の戦場となった沖縄「ひめゆりの塔」は勤労奉仕のために、最前線に駆り出され、死んでいった女学生達による「ひめゆり部隊」の慰霊碑である。映画は沖縄戦における彼女らの悲劇を通して、戦争の悲惨さ、平和の尊さを痛切に訴えている。公開当時大ヒットし、1982年には今井自身によって再映画化されている。

監督：今井 正
主演：津島 恵子
岡田 英次

1953年/35ミリ/モノクロ/130分/東映

ひめゆりの塔

3日(金・祝)15:00 6日(月・振休)11:00
12日(日)15:00



群馬県高崎市の市民オーケストラである群馬交響楽団に取材し、市民活動を通して音楽が幅広く浸透していく過程を、ほのぼのとしたタッチで描いた作品。名曲や民謡、童謡もふんだんに取り入れられている。オリジナルは177分だが、残念ながらカット版しか存在していない。

監督：今井 正
主演：岸 恵子
岡田 英次

1955年/35ミリ/モノクロ/150分/中央映画

ここに泉あり

4日(土)11:00 6日(月・振休)15:00
9日(木)19:00 10日(金)14:00



映画公開当時、まだ最高裁に上告中だった八海事件を扱った作品。ある地方で起きた老夫婦強盗殺人事件の共犯として逮捕された若者達。逮捕されたのはいわゆる「チンピラ」であり、充分な捜査もせず見込みと自白の強制だけで起訴し、有罪にされた。警察や検察、裁判官のあり方やそうした冤罪を引き起こす社会的状況を鋭く告発した社会派作品。キネマ旬報ベスト・ワン。

監督：今井 正
原作：正木 ひろし
主演：草薙 幸二郎
松山 照夫

1956年/35ミリ/モノクロ/122分/現代ぶろくしょん

会 期：2日(木)～12日(日)
休館日・休映日を除く
観覧料：500円(大人)
400円(大学生・高校生)
300円(中学生・小学生)

※定員制・各回入替制。
※チケットはすべて当日券です。前売り券はありません。
※福岡市在住の障害者の方は無料、福岡市在住の65才以上の方は半額。(手帳の提示が必要です。)

今井正は、戦後の民主主義高揚の空気の中で「青い山脈」や「また逢う日まで」といった、しっかりとしたテーマを保ちながら広い大衆性を持った作品を作り注目された監督です。社会性と娯楽性を高いレベルで両立出来る作家、そのスタイルの柔軟さという意味では同時期の黒沢明や木下恵介を凌ぐ部分もありました。5年に及んだ東宝争議とその後のレッド・パージに絡んで東宝を退社した際も、その才能を惜しまれ会社側は慰留したそうです。退社後は独立プロ運動に参加し、佳作を作り、独立プロ運動が退潮していった1953年には新興の東映で「ひめゆりの塔」を演出、その後も「ここに泉あり」や「真昼の暗黒」といった作品で社会性を持ちながら、その時々に応じた柔軟な演出で多くの佳作、名作を作り続けました。

今回の特集は、当館が新たに収蔵した作品を中心に今井正の1950年代の代表作を紹介するものです。

真昼の暗黒

映画と映画雑誌

昨年の7月号、12月号に掲載した映画と映画雑誌に関するコラムの第3回目になります。前回が大正末まででしたので、今回は昭和の始めからです。

「大正浪漫」「大正デモクラシー」といわれた大正時代は第一次大戦終結による反動不況と大戦関東大震災で幕を閉じ、「昭和」となります。経済的、文化的に一気に成長した大正時代とは裏腹に、昭和の幕開けは決して明るいものではありませんでした。そんな中でも、映画は産業としても文化としても成長していきます。大正の終わりから昭和初期は日本無声映画の黄金時代ともいわれ、多くの監督達が登場し、数々の名作が生まれています。そしてこれに伴い、映画雑誌の内容も充実していきます。それまで映画の広告媒体や業界誌が中心でしたが、純粋な映画評論誌が現れ、学生などを中心に愛読されるようになります。こうした評論誌の代表的なものが大正15年(1926年)に映画評論社が発行した「映画評論」です。この雑誌は創刊当時はわずか30頁足らずの雑誌でしたが、創刊後、わずか2、3年で100頁近いかなりの厚さになっています。そして昭和16年に戦時下の言論統制によって他誌と統合されますが、戦後に復活しています。この他、硬派な評論誌としてはキネマ旬報社が大正14年に創刊した「映画往来」があります。この「映画往来」の創刊号は60頁ほどですが、こちらも同様に徐々にページ数を増やし、統合を挟んで戦後まで存続します。創刊時のこの雑誌の特徴は「広告を載せない」ということでした。これは掲載広告に左右されずに面白くない映画は面白くないというためだったのでしょうか。

余談ですが「映画評論」は最初の頃の号は頁

の打ち方が特殊で、1月号が例えば24頁だとすると、2月号は25頁から始まり、これが12月号まで続いて翌年の1月号はまた1頁から始まっています。当時こうした頁の打ち方が流行ったのでしょうか。とにかくこうした頁の打ち方が創刊から4年ほど続いています。

創刊当時、「映画評論」はどちらかといえば、ヨーロッパ映画中心、「映画往来」はアメリカ映画中心の記事が多かったようですが、日本映画に関する記事も載せています。これらの雑誌の創刊と成長は、当時の映画芸術に対する意識の高まりを反映したものだといえるでしょう。また、この時期には雑誌以外にも内外の映画理論の書籍が多く発行されています。

その他、昭和5年に「映画の友」が創刊し、大衆向けの映画雑誌として広く一般に読まれました。

日本映画における本格的なトーキーの登場は昭和6年(1931年)の「マダムと女房」(監督:五所平之助)からとされていますが、これに先立つ昭和4年から昭和5年の短期間に「傾向映画」と呼ばれる作品群が流行しました。これは左翼思想的傾向を持つ映画ということで、内田吐夢の「生ける人形」や伊藤大輔の「斬人斬馬剣」(ともに1929年)や鈴木重吉の「何が彼女をそうさせたか」(1930年)などの作品を生み出しました。「傾向映画」は当時の暗い世相と左翼運動の盛り上がり背景に、一時期は同様の作品が数多く作られます。しかし、すぐに厳しい検閲にあうようになり、中には完成しても上映出来ない作品なども出てこの流行は長くは続きませんでした。もっと急進的な左翼映画運動として、この「傾向映画」と同じ時期に「プロ・キノ」という記録映画の組織も登場します。またこうした左翼映画運動よりの雑誌として「新興映画」(1929年創刊)や「映画解放」(1931年創刊)など幾つか発行されますが、これらも長続きはしませんでした。

大正の終わりから昭和初期は日本の歴史における重要な分岐点でした。関東大震災や金融恐慌、世界恐慌と続き、当初は左翼思想が、やがて軍部の急進派を中心に右翼思想が力を付けてきます。そして昭和6年(1931年)には満州事変をおこし、翌年の3月には満州国を建国し、日本は帝国主義に向かっていくことになります。そうした時代背景にあって「映画」や「雑誌」はもはや単なる「娯楽」や「文化」ではなく、プロパガンダのための重要なメディアと位置づけられていくようになっていきます。

映像調査員 山本 宰

お知らせ

国際講座「金印と中国の思想」～受講者募集

日中国交正常化30周年を迎える年に、現代中国研究に大きな功績を築かれ、福岡アジア文化賞も受賞された竹内 実・京都大学名誉教授を講師に迎え、日本と中国の関係を文化の角度から考える講演会を開催します。

日 時:5月19日(日) 午後2時～午後4時
会 場:総合図書館1F映像ホール・シネラ
受講料:無 料

受講希望者は5月6日(月)までに
電話(852-0600)・FAX(852-0609)
もしくは館内配布の申込書でお申し込みください。
住所、氏名、年齢、性別、電話番号をお知らせください。

お問い合わせ/
福岡市総合図書館 図書利用課(852-0600)

ビデオ編集技術研修室のご案内

ビデオ研修室では、家庭で撮影されたビデオ(Hi8・DV)や各行事の記録ビデオの編集などに利用できます。(使用料1時間500円、連続使用3時間迄)
※詳しくは福岡市総合図書館映像資料課まで

シネラNEWS送付のご案内

定期購読ご希望の方に毎月シネラNEWSをお届けしております。購読を希望される方は、平成14年6月号～平成15年3月号までの郵便切手(90円×10ヵ月)を同封の上、下記宛先へお申し込みください。
宛先:〒814-0001福岡市早良区百道浜3-7-1
福岡市総合図書館 映像資料課

5月		上映スケジュール	
1水	休 映 日		
2木	今	14:00 青い山脈・続青い山脈	19:00 また逢う日まで
3金	祝	11:00 ひめゆりの塔	15:00 ここに泉あり
4土	休	11:00 真昼の暗黒	15:00 青い山脈・続青い山脈
5日	祝	11:00 また逢う日まで	15:00 ひめゆりの塔
6月	休	11:00 ここに泉あり	15:00 真昼の暗黒
7火	監	休 館 日	
8水	督	休 映 日	
9木		14:00 青い山脈・続青い山脈	19:00 真昼の暗黒
10金	特	14:00 真昼の暗黒	19:00 ひめゆりの塔
11土	集	11:00 また逢う日まで	15:00 青い山脈・続青い山脈
12日		11:00 ひめゆりの塔	15:00 ここに泉あり
13月		休 館 日	
14火		休 映 日	
15水	韓	14:00 成春香	19:00 離れの客とお母さん
16木	韓	14:00 常緑樹	19:00 米
17金	韓	14:00 心の故郷	19:00 お金
18土	韓	11:00 離れの客とお母さん	15:00 成春香
19日		※図書館主催「国際講座」のため、上映はありません。講座の詳細はお知らせ欄をご覧ください。	
20月		休 館 日	
21火		休 映 日	
22水	韓	14:00 ロマンス・パパ	19:00 常緑樹
23木	韓	14:00 離れの客とお母さん	19:00 荷馬車
24金	韓	14:00 米	19:00 成春香
25土	韓	11:00 心の故郷	15:00 ロマンス・パパ
26日	韓	11:00 荷馬車	15:00 お金
27月		休 館 日	
28火		休 映 日	
30木		休 映 日	
31金		月 末 休 館 日	



交通アクセス: 当館の駐車場スペースに限りがありますので、できるだけ公共交通機関をご利用ください。
地下鉄: 西新駅または藤崎駅から徒歩15分
西鉄バス: 天神～都市高速経由～福岡タワー南口 (所要時間 昼間で約20分)
博多駅～都市高速経由～福岡タワー南口 (所要時間 昼間で約25分)
福岡タワー南口バス停から徒歩3分
いずれも、昼間は10～15分間隔で運行されていますので大変便利です。お近くのバス停からのご利用につきましては、西日本鉄道テレホンセンター(電話 733-3333)に直接お問い合わせください。

編集雑誌

5月31日から韓国との共同開催の「ワールドカップ」が始まります。そこで特集も、韓国映画と日本映画としました。韓国からは、当時大衆的な人気を博した代表的な男優と女優であるキム・スンボとチェ・ウニが登場します。そして日本からは、あのガラス越しのキスシーンで有名な「また逢う日まで」の今井正監督です。また、当時別々に公開された『青い山脈』と『続青い山脈』を一挙上映します。黄金時代の韓国映画と日本映画をご堪能ください。(M.Y.)

280 古紙配合率80%再生紙を使用しています。

Fukuoka City Public Library Movie Hall Ciné-là
福岡市総合図書館映像ホール・シネラ

〒814-0001 福岡市早良区百道浜3丁目7番1号

福岡市総合図書館(代表)092(852)0600 映像資料課092(852)0608 Fax.092(852)0609

福岡市総合図書館ホームページアドレス <http://toshokan.city.fukuoka.jp/>